

接頭辞「なん」考

A Note on the Prefix “N a n”

山西 正子
Masako YAMANISHI

Keywords : indefinite, *nan*, *iku*, parasynthesis
キーワード : 不定、何 (なん)、幾 (いく)、誤用

【要旨】

本稿は、「何人」「何回」など、数量・程度などが疑問または不定であることを表す接頭辞「なん」の、現代語におけるわずかな「変化」を指摘し、それが、単なる「誤用」か、新しい用法につながるかを考察するための契機としたい。まず以下の4点を指摘する。

- ① 代名詞「なに」は発音上の変化により「なん」になり得るが、接頭辞「なん」は、「なに」にはもどせない。ある語彙Xにおいて、「なんX」「なにX」が共存するばあい、両者は峻別されねばならない。
- ② 接頭辞「なん」は、同じく数量・程度などが疑問または不定であることを表す接頭辞「いく」との間で、役割分担——すなわち字音語には「なん」が、和語には「いく (幾)」が使用されやすい——がないとはいえないが、全体的にみれば、「いく」はそれ自体が減少傾向ではないか。
- ③ 「何年となく」のかたちは、「具体的には示さないが多くの年」を意味するが、後半の「なく」を省略し「何年と」のみで、同じ意味を表せるようになってきている。「何十人もの人々」においても、一部を省略した「何十人の人々」で同じ意味を表せるとの「誤解」が生じているのではないか。
- ④ すでに「いく」は、「いくた (幾多) の」をはじめ、「いくとせ」「いくとしつき」「いくひさしく」のような形で、「疑問または不定」ではなく、単に「多くの」を表す用法を獲得している。「なん」は、それと共通の面もあろう。

【内容】

0. 問題のありか

1. 関連事項の確認
 1. 1 対象とする「なん」の定義
 1. 2 「なん」と「なに」の差異
 1. 3 その他の事実—— 連濁とのかかわりなど
 1. 4 「いく（幾）」の側面——減少傾向と「遺産」
 1. 5 「いく」と「疑問・不定」
 1. 6 「いく～」と「数の多さ」
 1. 7 「いく」と「疑問・不定」との距離を示す例
 1. 8 最近の例
2. 現代語の用例と考察
 2. 0 稿者の規範意識
 2. 1 日刊紙の用例
 2. 2 口頭語の例
 2. 3 インターネットの用例
3. 推論の提示
 3. 1 推論の契機
 3. 2 考察
4. おわりに

0 問題のありか

稿者は、以下の表現に違和感を持つ。

- (1) 秀吉は茶の道のわからぬ人間だった。その秀吉の命によって、自分は今、命を断つ。不意に、しばらく忘れていた怒りが火を噴いた。命が惜しいのではない。何十年かけて築き上げた茶の道が惜しかった。

(三浦綾子『千利休とその妻たち』下巻1980 新潮文庫2014・36刷331頁)

接頭辞「何」を含む「何十年」が、不定要素を含まない、平叙文に使用されることが許容されるのであろうか。あるいは単なる校正ミスであらうか。

試みに、以下の疑問文（作例2）（作例3）の2例で確認する。

（作例2）この道路は完成までに、どのくらい、かかりましたか？

（作例3）この道路は、どのくらいかければ、完成しますか？

これらの問いに対して

(作例4) この道路は完成までに、何十年もかかりました。

(作例5) この道路は完成までに、詳しくは知りませんが、何十年かかかったそうです。

(作例6) 何十年かかるか、分かりません。

(作例7) 何十年かかるにせよ、完成させます。

などが違和感なく理解できる。10年単位の長期間であったことを詳しく知っていれば、(作例4)のように、「何十年も」となる。事情に疎ければ、(作例5)のように、「何十年か」となるだろう。また、不定要素のある(作例6)(作例7)であれば、「何十年」のみでよい。

まずは、用例(1)が単なる校正ミスではないものとして、その存在理由を模索していく。

なお、用法の説明は便宜上、以下のようにする。未整理の部分もあり、再検討の必要がある。

| | |
|-------|-----------------------------------|
| 疑問表現 | 「お客は何人か」——「X人」という答えを期待する。 |
| 不定表現 | 「お客は何人か、分からない」——お客があるのは分かっている。 |
| 確定表現 | 「お客は何人も来た／何人と(なく)来た」——多いことを知っている。 |
| 未特定表現 | 「お客は何人か来る」——正確には知らないが、極端に多いのではない。 |

1. 関連事項の確認

1. 1. 対象とする「なん」の定義

本稿の関心が「何十年」にあることから、ここでは、『大辞泉』(1998 小学館)の記述を基準とする。

なん【何】 ㊦『代』——略——

㊦〔接頭〕名詞または名詞に準ずる語について、数量・程度などが疑問または不定であることを表す。「一回」「一キロ」

また、『日本国語大辞典』第二版(2001 小学館)は、上記よりさらに詳しいので。必要に応じて援用する。

なん【何】 ㊦『代』——略——

㊦『感動』——略——

㊦『接頭』名詞について、数・量・程度・時間などが疑問であること、または不定であることを表わす。比較的多くは、字音語について用い、「幾(いく)」と対応する。「何回」「何キロ」「何時(なんじ・なんどき)」など。

すなわち、代名詞「なに」が、口頭語レベルで「なん」と発音される場合の「なん」ではなく、接頭辞の「なん」である。

レストランでメニューを見ながら「なににしましょうか」と尋ねるか、「なんにしましょうか」とするかは、意味上は等価である。しかし、接頭辞「なん」は、「なに」では代替できない。

1. 2 「なん」と「なに」の差異

このことは、たとえば以下の状況で明確になる。

(作例8) 花子「パパ、トンボがいるよ。」

父親が、オニヤンマなのかシオカラトンボなのかアカトンボなのかを知りたいのなら、

(作例9) 父親「なにトンボかな」

そして、トンボの数を知りたいのなら

(作例10) 父親「なんびきかな」

と尋ねることになる。「なんとんぼ」とはならないであろう。また「なにひき」もない。

さらにいえば、多くの名詞は、慣用表現「ひとと花さかせたい」「ひとと皮むけた」「ひととっ走り行って来ます」「ふたつ返事」などの慣用表現はあるが、一般的には助数詞にならず、「匹」「枚」「本」などの助数詞に依存する。その一方で、「匙(さじ)」、「皿(さら)」などのように、名詞自体が助数詞になれる場合「なに」と「なん」は区別されねばならない。

「なにさじ？」の答は「大さじ、小さじ、茶さじ」などだが「なんさじ？」の答は「ひとさじ、ふたさじ」である。「なにさら？」の答は「菓子皿、スープ皿」など、「なんさら？」であれば「ひとさら、ふたさら」である。

煩雑だが、以下の状況で確認されたい。家庭での調理場面を想定してみる。

(作例11) 母親「お砂糖はおさじで計って入れるのよ。」

(作例12) 太郎「なにさじで？ 大さじ、それとも小さじ？」

(一般的には「どのおさじで？」でだが、「なにさじ」も不可能ではない。)

(作例13) 太郎「なんさじ？ ひとさじ、それともふたさじ？」

大相撲ファンでなくとも、以下の差異を聞き違えることはない。

(作例14) 「大鵬の初優勝は1960年だけれど、なに場所でしたかね？」

「九州の十一月場所です。」

(作例15) 「大鵬の優勝は、なん場所続きましたかね？」

(作例16) 「大鵬は、なに部屋べやでしたかね？」

(作例17) 「ところで、大相撲の部屋は、全部で、なん部屋べやありますかね？」

(一般的には「いくつ」だが、「何部屋」も不可能ではない。)

地理が好きな子どもであれば、以下のようなクイズを考え出さだろう。

(作例18) 淡路島は、なに県ですか。

(作例19) 海に面していない県は、なん県ありますか。

1. 3 その他の事実—— 連濁とのかかわりなど

さらに、「針（はり）」、「鉢（はち）」、「袋」など、ハ行音のばあいは、発音に区別がある。

「なにばり？」なら「縫い針^{はり}、待ち針^{はり}」など、「なんはり？」は外科手術の傷の大小を推定する「十針、二十針」などで、音は「(に) じっぱり」もしくは「(に) じっぱり」である。針数がいくつであれ、「ばり」にはならず、「はり」か「っぱり」であろう。「ばり」は針の種類を尋ねる「なにばり」専用である。

同じことは、「鉢」（和語ではないが）にもいえる。「なにばち？」の答は——「蜂」は、助数詞にはならない——「植木鉢、金魚鉢」など、「なんはち／ばち？」であれば「ふたはち、ろっ（六）ばち」などであろう。

「袋」も同様、「なにぶくろ？」は「紙袋、ポリ袋」など、「なんふくろ／なんぷくろ？」は「ひとふくろ／じっぷくろ」であろう。

ハ行音に関していえば、「ほん」（和語ではないが）に着目すべきである。

「なん本^{ほん}」は、本数に関してきわめて一般的な表現である。この場合、質問は「ほん」であるが、答えは、「いっぽん」「にほん」「さんぽん」のように、ハ行音が交替する。

一方、写本やその系統を扱う分野では、しばしば「青表紙本^{あおびょうし}」「烏丸本^{からすま}」など、「なにほん／ぽん」が話題になる。この場合、質問は「ほん／ぽん」であるが、答えは、稿者の知るかぎり、「ほん」である。

1. 2で述べた「さら」の例を含め、種類を尋ねる「なに」の場合は連濁を生じ、数を尋ねる「なん」の場合は生じないのは、両者が峻別されるべきだからである。

精査を経ていないが、この種類を尋ねる「なに」は、他の語においてもかなりの確率で連濁を生じる。

たとえば、「蛙」「鯉」「蟬」「鳩」「鮒」「蛭」などは助数詞にならないが、種類については「なにがえる」「なにぜみ」などとなる。「種類については連濁」ルールが徹底されていると考えたい。

これは、かりにある語彙Xに「なにX」と「なんX」が共存する場合には、「聞き違い」を二重に防止するための「しかけ」ともなる。「なに」と「なん」で区別し、さらに連濁の有無を確認する、まさに「なんX」にとっては「保護装置」である。

なお、「さじ」あるいは「かご（籠）」などについては、連濁の原則上「ざじ」「がご」が認められないことが優先されている。

ほかにも、漢字表記「何色」について、「なにいろ」は色彩名を尋ね、「なん色^{しよく}」は絵具の数を尋ねることになる。

かほどに、接頭辞「なん」は、「なに」と同一視されてはならない、意味のある存在といわねばならない。

一部の国語辞典が、紙幅の制約ではあろうが、接頭辞としての「なん」を立項していないのは残念なことである。

1. 4 「いく（幾）」の側面——減少傾向と「遺産」

ここでは、「いく」の減少にふれつつ、1. 7以下の、その「遺産」ともいうべき用法へのつながりを考察する。

1. 1で示したが、『日本国語大辞典』第二版は、「なん」と「いく」を対比させていて、「なん」と「比較的多くの字音語」との関連を述べる。さすれば、「いく」と和語との関連が示唆されるように理解したいが、「いく」——同じく「接頭語」としている——の項目には、そのような記述はない。

実際の状況についていえば、近年、「いく」は端的にいうなら、「減少傾向」ではないだろうか。卑近な例で、「いく」から「なん」への勢力交代を示す。

稿者の祖父（1888～1972）は、しばしば

「お宅はお孫さんはいくたりか^{よつたり}ね？うちは四人だ。」

「学校は、いく日^{にち}から始まるのかね？」

「年寄はいく度^ど聞いても、すぐ、忘れるもんだよ。」

「今晚はご馳走だ。おかずがいくいろ／しなもある。」

と言った。

稿者（1946年生まれ）は、

「お宅はお孫さんはなんにん？」

「学校はなんにち^{にち}から始まるの？」

「年寄はなん回^ど／度^{べん}／遍聞いても、すぐ、忘れるものよ。」

「今晚はご馳走ね。おかずがなん種類もある。」

と言う。

同時に、「いく」と字音語の共起は上述の「日」「度」で見られたし、他にも「分」「星霜」が辞書にもある。

太平洋戦争当時「敵は幾万ありとてもすべて烏合の勢なるぞ」の一節で「幾万」になじんだ世代も健在である。文部省唱歌「汽車」（1911年）には「早くも過ぎる幾十里」とある。

夏目漱石『草枕』（1906年 2. 0で再度ふれる）には「何日」「何晩」に「いくにち」「いくばん」のルビがある。

次の例でも「いく」は字音語と共起している。

(20) この『国史大辞典』でも——略（私は）——本絵巻（稿者注『源氏物語絵巻』）に関するこれ迄の知見を要約記述しておいた。しかしすでに幾十回となくこの絵巻に接してきた私は、その度に——以下略

（秋山光和「美術史家にとっての『国史大辞典』」『史窓余話』15 1996 吉川弘文館）

これは秋山（1918～2009）の、『国史大辞典』の付録『史窓余話』の一文である。稿者は高

年齢層に属するが、「幾十回」は想起できず、「なん十回」以外はほぼ、考えつかない。

一方で、稿者は、個数/年齢を「いくつ」、価格を「いくら」とするが、周辺の幼児を含む低年齢層には「何個/歳」「何円」も無視できない。「ママ、りんごは何個買うの?」「太郎くんは何歳?」などをしばしば耳にするし、「このミニカー、何円?」を聞いたこともある。

「いく」は、「字音」との結合がないわけではないが、そもそも全体的に「減少傾向」にあると認めたい。

いま、試みに、19～20世紀の雑誌『太陽』の検索システム「ひまわり」により、「幾十年」と「何十年」、「幾日」と「何日」を、文字列のみで比較すれば、それぞれ、12:8、45:47であり、「幾」は無視できない。

「幾人」と「何人」であれば、「幾人」118例に対し、「何人」は761例であるが、その「何人」の大半は文語文中の「なんびと」と読むべきもので、「幾人」と比較すべき「なんにん」の「何人」は少ない。以下はその、多くはない「何人」である。1901年12号の「風俗改良問題」の一節で、哲学者井上哲次郎(1855～1944)によるものである。

此間も二週間ほど旅行して著しく感じたことがある。其一二を云へば一等室に西洋人が何人か乗つて居つて、其中に貴婦人も見えたが、此時暑いから仕方がないと云へば云ふべきだが——略——

1. 5 「いく」と「疑問・不定」

「いく」も原義は、「疑問・不定」であったと考えられる。

現在でも頻用される「いくつ」「いくら」の実態からも明らかであろう。

(作例21)「荷物はいくつですか」

(作例22)「荷物はいくつあるか分かりません」

——あることは分かっているが数は不明——

(作例23)「この絵は、いくらですか」

(作例24)「この絵は、いくらでも、私の趣味には合わない」

——1万円か1億円か、いずれでもよい——

そして、「疑問・不定」を含まない文にするには、

(作例25)「荷物はいくつもありますが、軽い物ばかりです」

——「多い」と認識している——

(作例26)「荷物はいくつかありますが、自分で運べます」

——「さほど多くない」と認識している——

(作例27)「資金は、いくらでもあります」

——「多額」と認識している——

この場合、(作例24)の「いくらでも」とは、アクセントが異なる。

(作例28)「資金は、いくらか、あります」 — 「少額」と認識している—
のように、「も」「か」などをともなう。

「も」は「いつも」「だれも」「どこも」のように「網羅する要素」、「か」は「いつか」「だれか」「どこか」のように「未特定であることを明示する要素」である。

「いくら」「いくつ」のみでは、「疑問・不定」しか示せない。(作例27)(作例28)は、それぞれ、「資金は、いくらありますか」に対する答で、潤沢か些少かによって異なっている。

この「疑問・不定」は、百人一首の「淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に 幾夜寝覚めむ 須磨の関守」(源兼昌)をはじめ、用例は多い。むろん、近代に至っても用例はある。

(29) 幾山河越えさり行かば 寂しさの終てなむ國ぞ今日も旅ゆく

(若山牧水1908年『明治文学全集63』筑摩書房刊による)

では、推量の助動詞「む」が使用されており、「疑問」が看取できる。

1. 6 「いく〜」と数の多さ

そして、「幾〜」が、「明確、具体的には示せないものの、数が多いこと」をいうときには、しばしば「も」あるいは「となく」をともなう。用例(20)が「幾十回となく」とするのも、その1例である。

『日本国語大辞典』の用例からもそのことが知られよう。

(引用例30)「幾日路も苦で月見る役者船」(俳諧・ひさご 1690)

(引用例31)「又一つの鳥籠の中にはひよこいく羽もあり」(西邨貞『幼学読本』1887)

(引用例32)「日本国の其中に幾億万と限りなき、人の果報を請給ひ、五十四郡の御主と」
(浄瑠璃・伽羅先代萩 1785)

(引用例33)「早乗の籠は毎日幾立となく町へ急いで来て」

(島崎藤村『夜明け前』(1932~35))

などである。

また、通行の国語辞典の例も、同様に「〜も」「〜となく」を示している。

(引用例34)「幾千年も」(集英社国語辞典 2000)

(引用例35)「雨の日は幾日も続いた」(明鏡国語辞典 2002)

(引用例36)「幾百年となく」(岩波国語辞典 2000)

1. 7 「いく」と「疑問・不定」との距離を示す例

しかし、「も」「となく」をともなわない例もある。いずれも稿者の記憶に残る韻文であり、「その範囲において」との制約はあるが、ともかく、「疑問・不定」とは距離のある、あえていうなら、「数えてみれば多いと思える」意をもつ「いく〜」が存在するのである。

(37) あおげば とうとし、わが師の恩。 教えの庭にも、はや いくとせ。

(1880年『小学唱歌集(三)』岩波文庫『日本唱歌集』による)では、「幾年経ったのであろうか」ではなく、「はやくも幾年も経ってしまった」という感慨が前面に出ているだろう。「推量」とは距離があると考えられる。

(38) 幾年ふるさと、来てみれば、咲く花鳴く鳥、そよぐ風、門辺の小川の、ささやきも、なれにし昔に、変らねど、あれたる我家に、住む人絶えてなく。

(犬童球溪「故郷の廃家」・1907年『中等教育唱歌集』岩波文庫『日本唱歌集』による)では、「幾年経ったのであろうか」とともに、「幾年も経ってしまった」との感慨があろう。

また、1950年代から、高校野球の有力校として知られるようになった、千葉県立銚子商業高校の校歌には

(39) 幾千年の昔より海と陸との戦いの 激しきさまを続けつつ犬吠岬は見よ立てり

(作詞：相馬御風・1910年 Yahoo! Japanによる)

とある。「幾千年か正確には分からないが、幾千年もの昔から」の意味であろう。「幾千年の」は「幾千年もの」から、「も」が省略されたものといえる。

映画のタイトル『喜びも悲しみも幾年月』(1957年公開)においては、「幾年月も夫婦ふたりで受け止めてきた」の意味で、「疑問・不定」の要素はないだろう。

なお、検索すれば、『草枕』には、「方幾里の空気」「幾条の銀筋」がある。「一辺が幾里にもなる広い空間の空気」「幾筋もの銀の筋＝雨」であり、疑問・不定ではない「いく」は散文にも存在しているのであった。

1. 8 最近の例

1. 4で述べたように、「幾～」が減少すると考えられる中で、以下のような例がある。

(40) 〈越中八尾は〉低い山々が町を囲み、幾すじの川が町の裾を洗い、坂の多い町です。

(八尾町内和菓子店のしおり 2015年2月現在)

(41) 姫路城は、幾重に連なる千鳥破風、唐破風の屋根と、白漆喰塗籠仕上げの城壁が見事に調和し——略——

(『公立共済友の会だより』48ページ 2015年5月1日)

(41)は「幾すじもの川」、(41)は「幾重にも連なる」となるのが通例ではなかったか。「も」が省略されるに至ったと考えられる。

(41)については慣用表現「幾重にもお詫び申し上げます」の存在から「幾重」自体にさしたる違和感はないものの、あるいは、1. 7のような韻文での用法が、散文にも——極論すれ

ば、いささかの「気取り」意識とともに——使用されたかと、考えられる。

このように、接頭辞「いく」は、「も」「となく」などをともなわず、単独で「数多い」ことを示せるようになっている。

「いく」は「なん」との対比でいえば減少傾向にある。その一方で、助詞「も」の添加なしに「数多くの」を表す用法を、表立ってはいないが、現代語の底辺に忍び込ませていると考えたい。

とすれば、「何十年」が、「疑問・不定」の要素なしに「何十年にもわたる」の意味を持ち得たとしても、これが「先行する「いく」からの「贈り物」と解釈される可能性もあろう。

すなわち、冒頭の三浦綾子の用法には、校正ミスではない可能性があることになった。

2. 現代語の用例と考察

2. 0 稿者の規範意識

はじめに、稿者の規範意識の一端を、夏目漱石『草枕』（1906年 青空文庫＝底本・ちくま文庫）で確認する。稿者の年代では、漱石あるいは森鷗外の文体が、ある種の「規範」と思い込まされており、これらを熟読することで、無意識的に、規範意識となってきたように受け止めている。

ここには、一部の問題例を除外すると、15例の、接頭辞「なん」と読むべき、漢字「何」がある。ルビはないが、「なに」と読むことは考えられない。

疑問表現 「何代くらい前の事かい」など2例

不定表現 「何十万本の髪が生えているか知らんが」「長い廊下を何度行き何度戻る気か余には解らぬ」など5例

確定表現 「着物を何枚も着せて」「何遍も聞くうちに」「何百という人間を」など3例

未特定表現 「何百尺かの空気を呑んだり吐いたりしても」など3例

すなわち、「疑問・不定表現」でなければ「も／と／か」をとまなうのである。

また、問題例は「どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、浮世小路の何軒目に狭苦しく暮した時とは違うだろう」であるが、これは、上記の「着物を何枚も」とは異なる。「何枚も」には、1枚目も2枚目も3枚目も、すなわち「多くの着物」を必要とするが、この「何軒目」は1か所でしかない、特定された「1軒」で「多くの」家屋は意味しない。

また、

一人前ひとりまえ何坪何合かの地面を与えて——略——同時にこの何坪何合の周囲に——略——

何坪何合のうちで自由ほしいままを擅とにしたものが——略

の2例目、3例目の「何坪何合」は、1例目の「何坪何合かの地面」を指す。未特定表現から「かの地面」が省略されているものである。

すなわち、稿者の規範意識では、接頭辞「なん」は「疑問・不定」でないかぎり、「も／と

／か」をとともうものなのである。

なお、『草枕』には、「幾分」5例、「幾多」2例のほか、「幾日前」「幾輪」「幾朶」「幾筋」など計18例の接頭辞「幾」があり、単に数値のみを比較すれば、「何」より若干多いことが知られる。森鷗外『雁』でも、「何」と「幾」はともに10例以下だが、「疑問・不定」でないかぎり、「も／と／か」をともなっていて、稿者の規範意識に重なる。

2. 1 日刊紙の用例

0 問題のありかおよび2. 0で示したように、稿者は、「疑問・不定」要素のない「何十年かけて」には違和感があった。しかし、「いく」の例を見ることにより、いささかの疑問が生じているとせねばならない。

この「違和感」が「時代錯誤」なのか否かを、「朝日新聞」の用例から検討する。稿者が実見した例とデータベース『聞蔵』からの例である。東京本社版の朝刊以外の例については、その旨、注記する。

結果を述べれば、基本的には、規範的用法が使用されるといってよい。

2015年9月26日までの、「何十年」「何十人」「何年」につき最新の用例を20例ずつ、計60例整理した結果を示す。

| | |
|-------|----------------------------|
| 疑問表現 | 2例 (42) (43) |
| 不定表現 | 4例 (44) (45) など |
| 確定表現 | 44例 (46) (47) (48) (49) など |
| 未特定表現 | 8例 (50) (51) (52) など |
| 問題例 | 2例 (53) (54) |

(42) 「こんなに笑ったのは何年ぶりのことでしょう。楽しかった」

(2015. 9. 15 福井県)

(43) 〈広島市の平和の広場で〉 原爆で被爆したアオギリの2世の苗木を植樹したとのこと。
何年後に花は咲くのだろう。

(2015. 9. 21 生活面)

(44) 「あと何年かかるかわからないが、この城郭跡を多くの人に知ってもらいたい」。

(2015. 9. 13 滋賀県)

(45) 〈16年前の殺人事件について〉 伊藤守署長は「何年経っても決して許されない事件。——略——」と話した。

(2015. 9. 17 横浜)

(46) 山の木は親子3代にもわたって何十年もかけて育てます。

(2015. 9. 21 福井県)

(47) 〈石木ダムについて〉 何十年にもわたって反対運動を続けてきた地権者の女性からも、これまでの苦悩を聞いた。

(2015. 9. 13 長崎県)

(48) 僕らの肩には、何十人ものスタッフやその家族の生活がかかっている、と言う少年たちもいるとか。けなげですねえ。

(2015. 7. 31 生活面 西部版)

- (49) そんなこんなで、何十人にも抜かれたけれども、1時間45分で頂上に着いた。
(2015. 7. 24 北海道)
- (50) 何十年か前、お酒を飲めない私が乾杯の音頭をとった時——略——
(2015. 8. 22 週末b)
- (51) 老人ホームは人生の終盤の何年かを過ごす大切な「自宅」です。
(2015. 9. 21 朝刊ライフ面)
- (52) 〈有機農業実践者が農業のさまざまについて〉わかりやすく、流暢に説明してくれる。きっと、何十人、何百人と同じ説明をしてきたのだろう。
(2015. 5. 8 但馬地方)
- (53) 〈演技上の涙について〉何十年女優やってるけど、1回も出たことない。
(2015. 9. 16 夕刊芸能面 発話者は女優)
- (54) 〈作家東野圭吾の取材活動について〉こちらは何十人がかりですが、お一人で、しかも20年前にこれをやっている。政府のシンクタンクに勤めたらどうかというくらいの才能です。
(2015. 6. 30 夕刊)

このように、60例の「なん」のうち、稿者の規範意識に反して、平叙文で「も／と／か」なしに「多くの」を示すのは、女優の発話による(53)のみである。なお、(54)については判断が難しいが、稿者であれば「何十人がかりかになります」と「か」を加えることになる。

すなわち、日刊紙の接頭辞「なん」の実態と稿者の規範意識とは、ほぼ、一致する。しかし、女優(1939生まれ)の口頭語として、たしかに反例が存在するのである。

2. 2 口頭語の例

2. 1でみた(53)は、口頭語であった。この間、稿者の「聞き違い」でないかぎり、以下の用法をラジオで聴取した。焦点としている「何十年」ではないが、接頭辞「なん」を含むので、ここでは同列に考えたい。個々の語について何らかの差異があるかは、今後、精査することとしたい。

- (55) 〈イベント会社のCM〉何千人、何万人の観客を熱くする——略——シミズオクト
(2015. 8. 25 TBSラジオ、野球中継中)
- (56) 〈善光寺ご開帳の本尊柱について〉何百万人の人が触れるので——略——
(2015. 4. 2 NHKラジオ 発話者は善光寺貫主)

稿者にとっては、いずれも「何万人もの」「何百万人もの」と「も」が必要な例である。このように、口頭語には、稿者にとっては異例の接頭辞「なん」があることは、否定できないと

予測がつく。

2. 3 インターネットの用例

Yahoo! Japanから、「何十年」「何十人」を検索する。ある意味で、もっとも「現代的」な例が採集できると考えるからである。

2. 3. 1 規範的用例

ここでも、「疑問・不定」要素のない「何十年／何十人」は、基本的には「も／か／と」をとまなう。

(57) 先輩からひと言：色んな職種があると思うのですが、結局どの仕事も遣り甲斐があると思います。その中であえて選ぶとすれば、やっぱり「人」ではないかと思えます。その人達と何十年も仕事をしたいと思える会社に入るのがいいのかなと思えます。
(www.ajieng.co.jp 2015. 9. 15)

(58) 勝手踏切は正規の踏切ではないが、近隣住民が何十年にもわたって横断し続けている場所。宇治市内には6カ所あり、うち4カ所は宇治市道になっている。残る2カ所はJR西の所有地で、今回閉鎖される場所もJRの用地になっている。

(www.sankei.com/west/news/140517/wst1405170055-n1.html 2015. 9. 15)

(59) 昨年12月に届いた書類には、300万円を超える負担額が記されていた。長年加入していた栃木県石油業厚生年金基金からだった。何十年も掛けてきた企業年金がなくなっただけ、追加負担まであるなんて。詐欺みたいなものだ。

(2015年3月2日 apital.asahi.com/article/news/2015030200005.htm 2015. 9. 15)

(60) あと何十年かで失われるだろう日本の里山 — いいね！

(ja-jp.facebook.com/.../ 2015. 9. 15)

(61) 取扱保険会社が30社以上もあるということで私達の希望に添った保険を親身になって提案して頂き、担当の方もとても親切で説明もわかりやすく何十年と保険料を納めていくという大事な事なので、今回は契約をし直して本当に良かったなと感じております。
(hokenfp.com/shops/46/voice/86 2015. 9. 15)

2. 3. 2 規範的とはいえない用例

予想されることではあるが、「疑問・不定」要素のない「何十年／何十人」が存在する。

(62) ニッセイとセゾンに積み立てしました、コツコツと何十年先を見据えて。公開日：2015年6月14日。投資信託。今月は投資信託に7万円積立をしました。積み立て年数が1年やそこらではあまり変わりませんが、現状をまとめます。

(solo-invest.com > ホーム > 投資信託 - キャッシュ 2015. 9. 18)

(63) 何十年後を見据えて選ぶ！おばあちゃんへのプレゼント♪。子供のころから、母親とはまた違った女性の目線で私を見守ってくれるおばあちゃん。そんなおばあちゃんへのプレゼントは、自分がこんなおばあちゃんになりたいという将来像も考え

(2015年6月15日 anny.gift > トップ > 手土産・その他 > その他・まとめ -
キャッシュ 2015. 9. 19)

(64) 父は、脳梗塞発症後、高次脳障害で老健入所中母は、心臓病 肺気腫 変形性関節症で入院中ひとりっこの為介護できるのは、私だけです。何十年続く介護に不安でいっぱいです。

(ansinkaigo.jp > 安心介護トップ > 介護のQ&A > 介護疲れ、介護負担 -
キャッシュ 2015. 9. 19)

稿者注：見出しは「何十年も続く介護・・・」とあり、「も」をとまなう。

(65) 第2回「何十年前のコマ回し、体験の大切さ」。コマ回しに熱中する子どもたち、やはり男の子に多い。毎日コマ以外のことをしないので、「明日からコマを園に持ってこないように……」と話した翌日。

(www.himawari-gakuen.ed.jp/.../何十年前のコマ回し、体験の……2015. 9. 19)

このほか、「何十年の時を経て自分の子供に読み聞かせる日」「何十年のコンプレックスを解消に！」「病気は何十年の積み重ね」「恐らく何十人に行った通知が飛んじゃってますが」「相続登記しないまま、長年放置していると、所有者が何十人になることもあり」など、稿者の規範意識にはない、「なん」がかなりの頻度で出現する。2. 1 日刊紙の用例で調査した状態とはおおいに異なる。インターネット上では、「も／と／か」を欠いたまま「多くの」を意味する「なん」が一定の勢力を得ていることが分かる。

3. 推論の提示

3. 1 推論の契機

本稿は、金澤裕之（2008）に示唆されている。金澤は、野田尚史ほかの『日本語学習者の文法習得』（2001大修館書店）の記述に言及し、

日本語の学習者たちが犯すいわゆる「誤用」も、時には日本語自身の「ゆれ」や言語変化と関わりを持ち得る重要な要素として、注目する必要があるかもしれないと考えられる。（10頁）

としている。

稿者が、初めて接頭辞「なん」の「誤用」に気づいたのは、中国人研究者の研究論文に接した時である。

「中日若者言葉の比較研究—ネット語・ケータイ語を中心に—」と題するもので、国立大学の学会誌に掲載されている、平成23年3月の論文である。

そこで、以下の2点に、ことさらに、違和感をもった。

(66) 言葉の構成から言葉遣いまで、何十年の研究を経て日本語の若者言葉についての研究は体系的になったと言える。

(67) 何年前に流行っていた「ベリー」「ナウい」に今の若者達は違和感をしているようである。

学会誌の研究論文であり、当然、ネイティブチェックがされているだろう。そのチェックを「すり抜けて」いるのである。

3. 2 考察

ここで翻って、2. 1の(53)を考えれば、これも、取材記者およびデスクの、二重チェックをすり抜けていると考えてよい。平叙文における「も／と／か」なしの「なん」は、2015年の時点で許容されることもあるとせねばならない。

稿者あるいは、日刊紙の一般的な「なん」への意識が、もはや、盤石なものではなくなりつつあることを、知るべきではないか。

さらに、インターネットの状況を見てしまった今は、「留学生の誤用」が「誤用」なのか、あるいは、日本語の運用上の問題と繋がるものか、考察すべきであろうと思わざるを得ない。

現段階で、接頭辞「なん」について、①②を指摘し、③④を仮に提案したい。

- ① 規範的な日本語では、たとえば「何十年」で見ても分かるように、疑問・不定に用いる。「何十年かかりますか」「何十年かかっても構わない」などとなる。平叙文では「あれから何十年も経ちました」「両親は何十年と（なく）働き続けました」「太郎も何十年か待ちました」となり、「も／と／か」をともなう。
- ② しかしながら、現代語には、「何十年」のみを平叙文に使用する例がみられる。例(53)(62)(63)(64)などである。
- ③ あるいは、同じく「疑問・不定」を表す「いく」が、全体的に減少していく中で、「も／と／か」なしで「数多くの」を表し、たとえば「幾万の星が輝く夜空」などが可能である。それと共通する面もあるかと考えられる。
- ④ 意味的に共通していれば、表現上の若干の差異は無視することはあろう。0 問題のありかの(1)「何十年かけて」は、規範的には「何十年もかけて」になるが、差異は「も」の有無だけであり、意味はともに「10年単位の長い年月」である。この「も」を無視することは、十分にあり得るだろう。

4. おわりに

以上、稿者の違和感に基づき考察をしてきた。

ことに、3. 2 考察での④については、言語習得上の負担軽減を考えれば、「意味が共通すれば、形式上の若干の差異は無視する」方向として、外国人学習者以外にも生じ得ることではないか。

例(53)の記者とデスク、例(66)(67)のネイティブチェック担当者の中に、「も」の有無は、大きな意味を持たなくなっているのだと考える。新聞でも、研究論文でも、チェックの重点は内容におかれ、語法上の疑問点は見逃されやすい側面もあろうと推測される。

この傾向が、どのような速度でどの程度まで浸透するかは予測できないものの、すでにネット上では、「も」の有無に関心を払わない例が散見されるに至っている。

もはや、「誤用」として徹底的かつ一方的に排除するよりは、まず「規範的ではない」と認識させる、その用意が必要な段階なのであろう。

【参考文献】

金澤裕之(2008)『留学生の日本語は、未来の日本語』ひつじ書房

【追記】

校正中に、以下の、「も／か」なしの「なん」に接した。

(追加例68)〈家庭内の転倒事故の多さと危険について〉何パーセントの人は寝たきりになって——略——(2015. 11. 1 NHKラジオ 発話者は女性スポーツ科学研究者(1958生まれ))

(平成27年11月4日受理)